

賴春水著

春水遺稿文、詩、別錄(在津紀事 師友錄)附錄

浪華名家墓所記

且又た義齋に關しては文學士幸田成友氏著大阪市史第一卷にも浪華名家碑銘集、在津紀事、師友志、浪花草等を引用して唯だ左の簡單たる記事を

## 再び秦邊紀略に就て

文學博士 内藤虎次郎

爰に本誌第三卷第三號に於て梁份の秦邊紀略に就て、聊か記す所ありたれども、猶ほ語りて未だ詳らかならざる者あり、蓋し當時未だ此書に關する文獻に就て、精細なる考査を經るに遑あらざりしを以て、今其の遺漏を補ひ、且つ其の誤謬を訂して再び述ぶる所あらんとす。

此書に就て評論せる前人の著述中、先づ第一に

爲せり。「春水及二洲が飯岡義齋澗の女を娶れること、文豪山陽が安永九年十二月を以て春水の江戸堀の僑居に呱呱の聲を發したることを忘るべからず」(完)

注意すべきは四庫全書總目とす。即ち史部地理類邊防の屬の存目中に、此書を載せて卷數を四卷とし、直隸總督の探進本とし、

不著撰人名氏。書中首卷河州條注内有西夷部落三十有奇。康熙十四年圍衛城一月。康熙二十二年。又犯衛地之語。又四卷近疆西夷傳内載康熙二十四年祝囊同科爾坤十八部由古北口入觀事。

則此書爲康熙間人所作。

とあるは、其の卷數の印本並に傳鈔本と合せざる外、其の著作年代の推定は、粗ば余の見るところと同じく、正鶴を得たるに近し。又

首載河州及西寧、莊浪、涼州、甘州、肅州、靖遠、寧夏、綏延等衛形勢要書。次載西寧等衛南北邊堡。

次載西寧等衛近疆、及河套次載外疆近疆西夷傳、河套部落、蒙古四十八部落考略、西域土地人物略。

とあるを見れば、其の編次の順序は、大體に於て印本に合せずして、寫本に合することを見るべく印本の體裁は後人の竄亂を経たる者なることを斷じ得べし。但し最後の西域土地人物略を載せたることは、獨り印本と合して、寫本に合せざるは、四庫館臣の見たる本も亦已に梁份の原本に非ざることを推し得べし。

其西域道里。以驛程考之。亦皆在茫昧之間。蓋一時得之傳聞。附錄卷末。均不足爲典要。

といひ、其の明代以來存せる舊文を採録したる者にして、秦邊紀略の著者の手に成らざることは、四庫館臣も之に思ひ及ばざりしに似たり。

四庫全書總目には、その卷一百八十二別集類存目に左の一項あり。

懷葛堂文集十五卷 江西巡撫採進本

國朝梁份撰。字質人。南豐人。嘗學於寧都魏

禧。頗得其文律。是集前十四卷爲雜文。末一卷

爲詩十二首。漫遊雜錄十一條。

されば今恐らくは佚せる梁份の文集は四庫館臣は猶ほ之を見るに及びたれども、而かも其の秦邊紀略の著者たるに思ひ及ばざりしが如し。是れ分編の官書に在りて、免がれ難き通弊なり。但し梁の郷貫を記せる者は此書と下に引ける王崑繩文集の萬季野六十序のみ正しきが如く同じく下に引ける章實齋の劉湘燿傳に梁を以て寧都人とせるは梁が師魏禧等が寧都の人なるによりて牽聯して誤を

致せる者なるべし。

次に此書に注意せるは有名なる西域の研究家たる徐松字は星伯なり。星伯は其の名著西域水道記卷三、哈喇渚爾所受水の條下に於て梁份の西陲今略として洮賴河に關する數句を引けるが、其の書名は偶々劉繼莊の廣陽雜記に記せる所に合せり。但し梁份の書には洮賴河を討來河に作り、肅州北邊下古城堡の注中に在り。

近時に及んで、繆荃孫字は筱珊は其の藝風堂文集卷七に於て、秦邊紀略跋一篇を載せ、四庫全書總目、章實齋撰劉湘燿傳、劉繼莊廣陽雜記等を引きて、考證頗る精しく、余が此の補記も、繆氏に負ふ所多し。其後余は又章實齋文集未刊全稿を得て其の撰する所劉湘燿傳を讀むことを得たり。余は曩に秦邊紀略の著者が梁份なることを證せんが爲に、耶潛三筆を引き而かも耶潛紀聞が多く前人の著者を鈔録したるを以て、此項も何か據る所あら

んと云ひしが、繆氏の引ける所並びに余が目睹せる所によりて、其の章實齋の劉湘燿傳より出でたることを知ることを得、又湘燿が著はせる秦邊紀略異同攷は六卷の書なることを知ることを得たり。本章實齋の劉湘燿傳は極めて詳細なる者にして、前に記せる六書世臣說中の曆法が王冠莊の書にかゝることを明記し余が先きに明の朱仲編の折衷曆法ならんとせるの誤なることを知り得たり。繆氏は秦邊紀略印本に二種あることを言へり。一は即ち余が已に見たる本にして、吳坤修が同治壬申の歲に安徽布政使たりし時に刊行せし者。他の一種は學人王文瀾が定州に刊せし者にして、此書の著者を蠡縣の李培とせしは、吳坤修が以て乾隆の時の人とせしと共に誤れりとせり。

余は又王源字は崑繩の居業堂文集を讀み、其中に梁份に關する者數篇あるを見たり。王源は顔元齋の門人にして、又好んで兵を談じたる一種異様の學者たること、劉繼莊等と相類せり。されば梁份とも交り至つて厚かりしが如し。居業堂集卷六

に與梅耦長書ありて其中に、

源於六月抵洪都。細訪江西人文。大不及曩時。自易堂諸君子歿。湯惕菴謝秋水諸先生。相繼謝世。後起者率多浮沈。獨蔡靜子。梁質人古文。可稱後勁。

とあり。易堂諸子とは即ち下に出せる魏彭諸人をいへるなり。又卷十三に梁質人文集序あり其中に梁子質人受業彭躬庵魏叔子兩先生門。兩先生俱負經世學。弗獲用。而叔子先生則以文章顯。質人樸擊強毅。嘗隻身走數萬里。欲繼兩先生志。而其文則一法魏先生。(中略)而予與質人俱落拓京師。窮且老依人。故老凋喪已盡。行輩存者無二三。悵悵然白頭相對。俯仰一無可爲。世情變益荒奇。非復人所料。時時握手悲歔泣下。爲文章呼搶天地。或痛飲酒。慨笑罵古今。相娛樂。而質人之文。益復沈鬱炫爛。如千金之璞。川谷滸肝。因出其生平之文。使予序。予竊以質人閱歷深矣。燕趙秦晉吳

楚齊魏之墟。西盡武威張掖。南極滇黔。迹之所及者廣矣。山川形勢。近代興亡成敗。荒遐軼事。得諸見聞者多矣。(中略)故其爲文。莫不足以別是非。闡幽隱。維世運。斯文之緒之不墜。其在是歟。等の句ありて、極めて、其文を稱揚せり。又卷十六萬季野六十序に

高士萬季野浙人。客京師。成六十。時丁丑春正月。(中略)予與南豐梁質人、嘉禾吳商志、新安蔡豫庵、黃自先、蔡瞻岷、漢水楊東里、福清許不棄、黃叔威、龍眠戴田有、孫幼服、毘陵錢亮功、下相徐壇長共置酒。商子爲萬子壽。

とあれば丁丑即ち康熙三十六年頃に於ける、梁份が此京に於ける交游状態を見るべく、萬季野は即ち萬斯同にして、清初の史學大家なり。又卷十九には十三陵記上下二篇あり。其中に

歲癸未。源友梁份暨新安黃日瑚。徒步往謁。(十三陵)份爲圖說。日瑚步趾形勢。規制遠近。吉凶無不

載。又參考國史諸陵建立始末。悉正肅松錄水東日記諸書之誤。

癸未は康熙四十二年にして、此歲梁份は十三陵拜謁の擧ある程なれば、其の老健なること知るべく其の謁陵の志は顧炎武等と同じく明朝を慕ふの餘に出でたる者にして、炎武が第六次の謁陵を爲したる康熙十六年より後ること二十六年なれば、當時志士の氣風尙ほ此の如き者あるを見るべし。然るに此の文中に又、

丙戌二月二十三日壬子源偕份子文中過昌平。癸丑雇役擔囊。步登天壽。

とあり。是れ康熙四十五年の事にして、此の記事によりて、份が子に文中といへる者あることを知ると共に、此時王源の謁陵に梁份の偕にせざるを見れば、其の存亡已に知るべからず。是れ梁份が事歴の記録に見えたる最後の者なれば、其の没年も概推することを得べし。

梁份と共に謁陵の擧を爲したる黃曰瑚は、蓋し劉繼莊の門人黃宗夏なるべし。居業堂集卷十六に黃復庵隱君六十序あり。

黃復庵隱君以癸未登六十。其子宗夏請予文爲之壽。(中略)君新安人。家於吳。(中略)申寅逆藩耿精忠叛、君與耿有舊、爲仇家陷。繫獄者十有四年。乃家破而君之學益進。(中略)宗夏爲予友劉繼莊先生高弟。既又請執贊於予。

とあれ、ば黃宗夏の父も亦明末遺民の一人にして、劉繼莊、王崑繩、梁質人等と同臭味の人たるべく隨て黃宗夏も、此等先輩に薰陶せられたるならん劉湘燿が著述目錄に與黃宗夏論黔粵苗疆形勢機宜書あり。その自註に宗夏幕粵西撫提署五次書問とあり。宗夏の事歴、並びに劉湘燿と宗夏とも交友たりしことを窺ひ知るに足る。凡そ此等の事實は皆梁份が著書の事情を釋ぬるに於て、發明する所あるべき者なり。